連載91 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（66歳・内科）

結腸がん末期、骨粗鬆症で寝たきり状態の父、そして、その介護疲れで疲労困憊の優しすぎる娘はあまりに悲惨

松山の医療圏は、歴史が証明しているように、知識人が多く、介護医療情報は熟知されています。

数年前のある日、悪性疾患の患者さん（男性）の在宅医療依頼がありました。その患者さんは、悪性疾患の再手術時には一時的に入院治療をしながらも、感染症などは訪問治療で、自宅療養をされていました。

しかし、大変な問題が起こり始めていたのです。経済的には裕福な家庭でしたが、長期的な施設入所やショートステイなどは拒否していました。さらに、他人の訪問介護を良しとせず、お子さんの中でもお気に入りの三女の娘さんだけを指名し、自宅介護してもらっていたのです。

私たちが、在宅医療を開始し、医療行為（食思不振・脱水症などに対する点滴行為など）をしていて気づいたのですが、娘さんには、あきらかに介護疲れが見えたのです。また、お父さまに精神的な支配を受けているようで、心身ともに疲れきっているようでした。私は、娘さんの体力や健康状態がとても心配になりました。

しばらくして、ご本人のプライドなのでしょうか、ベッドサイドにはポータブルトイレを置かず、自分でトイレに行こうとして転倒し、右下肢打撲症になってしまいました。私は、さっそく某病院の地域包括ケア病棟に短期間入院するよう説得に努めました。ご立派でわがままな父上さまから、心優しい娘さんを救ってあげたい気持ちでもあったのでした。

これは、いわゆるドクターストップです。臨床上ケース・バイ・ケースの対応もまた、現在の国策でもあるのです。

国策では、病名・症状いかんに関わらず、基本的には自宅療養です。そのためには、ご家族あるいはサービス事業者の協力が不可欠です。やむを得ず自宅療養が困難な場合には、介護施設利用もあります。そして、一般病院の指命としては、在宅医療と連携をとるよう広く求められています。それが地域包括ケア病棟なのです。

超高齢社会到来をふまえ、今後ますます、地域包括ケアシステム構築の充実が地域創生に大きなウエイトを示しそうです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/